第４４回
宮崎整形外科懇話会
プ ロ グ ラ ム

日 時：平成１４年７月１３日（土）１４：３０開会
会 場：宮崎県医師会館　大ホール（地下）
〒880-0023 宮崎市和知川原1-101　☎0985-22-5118
会 長：田　島　直　也
宮崎医科大学整形外科学教室

共 催 宮崎整形外科懇話会
住友製薬株式会社

参加者へのお知らせ

１４：００～ 受付

１．参加費；会場受付で申し受けます。　　1,000円
２．年会費；未納の方は受付で納入お願いします。　5,000円

演者へのお知らせ

１．口演時間；一般演題・１題６分、討論３分
　　；主　　題・１題６分、一括討論とします。
２．口演用スライド；単写とします。演者は講演３０分前までに スライド受付に
　　御提出 下さい。

世話人会のお知らせ

１４：００～１４：２０　小会議室（１階）

特別講演のお知らせ

特別講演　１７：００～１８：００
『骨・関節感染症の治療』
医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院院長　川嶌眞人　先生

註　上記講演は、
日本整形外科学会教育研修会専門医資格継続単位（１単位）、
〃　　リウマチ医資格継続単位（１単位）
に認定されておりますので御参加下さい。
なお、受講料は1,000円です。

事務局

〒889-1692 宮崎郡清武町大字木原 5200
宮崎医科大学整形外科学教室内　担当　渡邊信二
TEL 0985-85-0986（直通）　FAX 0985-84-2931

１４：３０ 開　会

１４：３０～１５：００　一般演題Ⅰ　　座長　園田典生

１．当院におけるガンマネイル手術手技の工夫
高千穂町国民健康保険病院　　塩月康弘、ほか

２．股関節固定術を施行された症例に対する人工股関節置換術
橘病院　整形外科　　柏木輝行、ほか

３．当院における有痛性三角骨障害の検討
野崎東病院　整形外科　　河原勝博、ほか

１５：００～１５：４０　一般演題Ⅱ　　座長　黒木隆男

４．ケトプロフェン湿布剤によるアスピリン喘息の１例
球磨郡公立多良木病院　整形外科　　浪平辰州、ほか

５．同時期に発症した骨盤内膿瘍の男子中学生の2例
宮崎県済生会日向病院　整形外科　　江夏　剛、ほか

６．当科における脊椎全摘術(total en bloc spondylectomy:TES)の経験
宮崎医科大学　整形外科　　勝嶌葉子、ほか

７．考案したヒッププロテクター（第2報）
平部整形外科医院　　平部久彬

１５：４０～１６：５０　主題：骨・関節における感染症

座長　谷脇功一、田辺龍樹

８．膝蓋骨骨折治療後に膝蓋骨骨髄炎および化膿性膝関節炎を発症した一例
宮崎県立延岡病院　整形外科　　山田正寿、ほか

９．下腿骨慢性化膿性骨髄炎後骨欠損に対しHuckstep nailおよびCeratiteを使用し再建術を施行した1例
国立都城病院　整形外科　　市原久史、ほか

１０．股関節インプラント感染に対する治療経験
宮崎医科大学　整形外科　　黒沢　治、ほか

１１．治療に難渋した人工骨頭置換術後感染の2例
宮崎県立宮崎病院　整形外科　　山口　徹、ほか

１２．当科における化膿性関節炎の経験
宮崎県立日南病院　整形外科　　深野木快士、ほか

１３．感染人工膝関節を抜去し再置換しなかった2例
宮崎県立延岡病院　整形外科　　公文崇詞、ほか

１７：００～１８：００　特別講演　　座長　田島直也

『骨・関節感染症の治療』
医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院院長　川嶌眞人　先生

開　　会（１４：３０）
一般演題Ⅰ（１４：３０～１５：００）　　座長　園田典生

１．当院におけるガンマネイル手術手技の工夫

高千穂町国民健康保険病院　整形外科　　○塩月　康弘　　河野　立
宮崎市郡医師会病院　整形外科　　神薗　豊

低侵襲で強固な固定性が得られるガンマネイルは、高齢者大腿骨転子部骨折に対し有用な内固定材である。我々は骨片間の内側皮質の対向が十分でない場合、術後の重大な合併症であるcut outや骨幹部骨折を来しやすいと考え、可能な限り低侵襲で解剖学的に整復するように努め、症例によっては一定期間免荷させている。

今回非観血的に整復位が得られない症例、あるいは術中に転位する症例を経験したのでその考えられる原因と当院における対処法を紹介する。

２．股関節固定術を施行された症例に対する人工股関節置換術

橘病院　整形外科　　○柏木　輝行　　田島　卓也　　矢野良英

【はじめに】変形性股関節症に対する関節固定術は、無痛の支持性を獲得し多くの症例で良好な成績をおさめているが、長期経過において、隣接関節や腰部への影響、日常生活への不満が認められる症例も少なくない。今回、われわれは固定股関節に対し人工股関節置換術を行った2症例について報告する。

【症例１】
患者：55歳、女性、両股関節症（右股固定術後、左末期股関節症）
主訴：右股関節固定によるADL障害、左股関節痛
現病歴、経過：1972年（35歳時）右股関節症の診断で、関節固定術を施行され、以後疼痛は軽減したものの固定によるADL障害、さらに左股関節痛も増強した。初診時右股関節の固定状態は良好で、左の手術的治療を検討したが、可動性獲得の希望が強く、右THAを施行、術後ADL上の障害は改善した。

【症例２】
患者：77歳、女性
主訴：左股関節痛、左股固定によるADL障害
現病歴、経過：1961年（39歳時）左股関節固定手術。股関節固定によるADL障害はあったものの、股関節痛は、軽度であった。平成５年頃より左股関節痛増強し左THA施行。可動域制限はあるもののADLの改善は良好であった。

変形性股関節症に対する関節固定術により、無痛の支持性と作業能力増進が得られるが、移動にかかわる主要関節の可動性喪失によるADL障害は避けられず、また長期経過例では隣接関節に有痛性障害が生じることも報告されている。今回の症例もADL障害に対する愁訴が強く、術後可動性獲得による満足度も高かった。

３．当院における有痛性三角骨障害の検討

野崎東病院　整形外科　　○河原　勝博　　樋口　潤一　　岡田　麻里

【目的】当院では週2回スポーツ外来を行っており多くのスポーツマンたちが受診してくる。中でも足関節周囲の痛みを訴え受診してくる症例は少なくない。今回我々は足関節後方の痛みを訴える有痛性三角骨障害について検討を行った。
【方法】対象は平成11年10月から平成14年3月までの間の有痛性三角骨障害の診断をした17名。性別はすべて男性。年齢は13歳から24歳（平均16歳）スポーツ種目はサッカー9名、野球4名、バスケット2名、ラグビー1名、スポーツをしていない者1名であった。
【結果】治療としては原則的に保存療法を行うこととした。経過観察のみ7名、ブロック5名、テーピング1名でそれぞれ軽快していた。4名については症状の改善が得られないために摘出術を行った。その後の経過は良好であった。
【考察】痛みの原因としては三角骨の存在自体であることは少なく、捻挫や外傷を契機としてその周囲の不安定性が増大することによるものではないかと思われた。

一般演題Ⅱ（１５：００～１５：４０）　　座長　黒木隆男

４．ケトプロフェン湿布剤によるアスピリン喘息の１例

球磨郡公立多良木病院　整形外科　　○浪平　辰州　　坂田　勝美

NSAID投与により発症する、いわゆるアスピリン喘息は臨床においてしばしば経験される。今回我々は0.3％ケトプロフェン湿布剤常用患者に対して2％テープ剤投与後喘息重責発作を来した症例を経験したので報告する。

患者は74才、女性。変形性脊椎症による腰痛に対して当科で長く0.3％ケトプロフェン湿布剤を投与されていたがとくに喘息の発症はなかった。今回急性上気道炎にて当院呼吸器科入院し抗生剤投与をうけ、症状軽快してきたため腰痛、肩関節痛の目的で当科紹介。2％ケトプフォフェンテープ剤投与した。約1時間後喘息重責発作出現。人工呼吸器管理にて薬物治療を行い、20時間後に抜管できた。0.3％と2％剤の最高血圧中濃度の間にアスピリン喘息を発症させる濃度が存在したものと考えられた。

５．同時期に発症した骨盤内膿瘍の男子中学生の２例

宮崎県済生会日向病院　整形外科　　○江夏　剛　　酒井　健　　金井　純次

今回われわれは同時期に同一学年男子中学生の骨盤内膿瘍の2症例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

【症例1】　14歳男子

平成13年12月23日より左股部前面の疼痛が出現するも疼痛は自制内で剣道の練習は続けていた。12月25日より疼痛は増強し、歩行が困難となった。年末年始に重なり、1月4日近医を受診。血液検査にて感染症を疑われ1月5日当科紹介初診となった。

【症例２】　14歳男子

平成14年2月1日39度の熱発にて小児科受診。扁桃腺腫大を認め急性上気道炎の診断にて抗生剤、総合感冒薬を処方され内服を開始した。2月2日より左上前腸骨棘の疼痛が出現し、2月5日歩行不能となり、当科初診となった。

【結果】　臨床症状、血液検査、画像診断から、骨盤内膿瘍と診断し、治療を開始した。今回の症例では、可及的早期に切開排膿術を施行し、良好な経過を得ることができた。

６．当科における脊椎全摘術（total en bloc spondylectomy:TES）の経験

宮崎医科大学　整形外科　　○勝嶌　葉子　田島　直也　久保紳一郎
後藤　啓輔　栗原　典近　猪俣　尚規
中村　嘉宏　黒木　修二

当科にてTESを施行した５例について若干の文献的考察を加え報告する。
【症例】年齢は２９～５２歳、男性２例、女性３例。腫瘍の内訳は、乳癌２例、軟骨肉腫（Grade Ⅰ）１例、Schwannoma（生検時desmoplastic fibroma　と診断）１例、巨細胞腫１例であった。生命予後が良好で根治延命が期待できる症例に対しTESを施行した。経過観察は３ヶ月～６年であり、全例局所再発は認めないが、化学療法を継続しなかった乳癌の１例で術後５年に多発骨転移を認めている。
【考察】当科におけるTESの適応は①根治の望める症例、②生命予後が良好で局所の根治の望める症例で、神経機能・ADLの改善と支持性の再建を目標にしている。１例で局所はdisease free であるものの再発をきたし、転移性腫瘍については全身のdisease freeには必ずしも結びつかないと思われた。
【まとめ】局所的根治目的では良好な成績であった。

７．考案したヒッププロテクター（第2報）

平部整形外科医院　　○平部　久彬

【目的】第42回の本懇話会にて発表したヒッププロテクターを更に工夫し、先端鋭なものに効果がほとんどないことや、辺縁の衝撃吸収力が弱いことなどに少し対応させ、機能障害の程度により使用しやすくすること。
【材料】前回発表した固定帯を腹巻きから夏季用、冬季用の布地、胸部固定帯（バストバンド）の一部、面ファスナー、紐などを使用したものに変更した。
【作製方法】前回報告した軟質ポリウレタンフォームを4等分し各々を合成樹脂で包み、其々を合わせて一体の如くし更に合成樹脂で包んだ。その上を更に合成紙で包んだ。固定帯は身体の前方にてバストバンドの如く固定力を調節できる様にした。まったく簡便なポケット型も作製した。
【使用の試み】片麻痺症例などに対する使用の試みについて呈示する。
【考察】前回報告した腹巻型については、固定力についての不安、暑さ、痴呆症例に装着困難などの指摘があった。今回はそれらの指摘に僅かでも対応しうる様に工夫してみた。
【考察】考案したヒッププロテクターの更なる工夫について報告した。

主題：骨・関節における感染症（１４：４０～１５：４０）

座長　谷脇功一　田辺龍樹

８．膝蓋骨骨折治療後に膝蓋骨骨髄炎および化膿性膝関節炎を発症した一例

宮崎県立延岡病院　整形外科　　○山田　正寿　木屋　博昭　弓削　孝雄
藤本　徹　田口　学　西里　徳重
公文　崇詞

【はじめに】化膿性骨髄炎は一般に長管骨に多く、扁平骨、とくに膝蓋骨での発生は極めてまれとされている。我々は最近、膝蓋骨骨折治療後に膝蓋骨骨髄炎、及び化膿性膝関節炎を発症した症例を経験したので報告する。

【症例】28歳　男性

平成8年膝蓋骨骨折に対し、骨接合術施行。2ヶ月後、膝蓋骨骨髄炎、化膿性膝関節炎を発症し、以降、持続洗浄、抗生剤治療行うも寛解、増悪を繰り返した。平成13年当科にて膝蓋骨骨髄炎感染巣の掻爬、抗生剤混入セメントビーズ充填、二期的に骨移植行い、炎症所見の消失を得た。その後現在まで再発を認めていない。

９．下腿骨慢性化膿性骨髄炎後骨欠損に対しHuckstep nailおよびCeratiteを使用し再建術を施行した１例

国立都城病院　整形外科　　○市原　久史　税所幸一郎　本部　浩一

【症例】21歳　女性

【現病歴および結果】H7年10月交通事故にて受傷。右下腿開放骨折に対し緊急手術施行。その後化膿性骨髄炎に進行したため、繰り返し手術施行するも難治性であった。受傷後約2年のH9年10月の細菌培養検査にて陰性であったが脛骨には大きな欠損が残存していたため、翌年4月Huckstep nailおよびCeratiteを使用し下腿再建術を行った。術後経過良好で現在長下肢装具にて歩行中である。

１０．股関節インプラント感染に対する治療経験

宮崎医科大学　整形外科　　○黒沢　治　　帖佐　悦男　　坂本　武郎
渡邊　信二　　野崎正太郎　　田島　直也

股関節インプラント感染に対し、抗生剤含有セメントスペーサーを使用し、二期的に再置換術を施行した症例につき検討したので報告する。

【対象・方法】インプラント挿入後感染例、男性4例女性3例、計7例7関節で、年齢は平均59.6歳であった。初回手術から感染発症までの期間は、平均6年であった。ほとんどの症例で細菌培養陽性、股関節痛、血液学的炎症所見やレ線上loosening を認めた。起炎菌は黄色ブドウ球菌などであった。二期的手術として最初は、インプラントの抜去・掻爬を実施し、その後抗生剤含有のセメントスペーサーを挿入する。次に炎症所見の鎮静化後再置換術を施行する。

【結果・考察】再置換時の細菌培養は陰性であった。再置換後の経過期間は、平均7年であるが、炎症所見の再燃を認めていない。臨床成績もほとんどの症例で、感染前の日常生活動作に改善した。本法は、利点として、病巣の抗生剤濃度を高めることができ、後療法や再置換術をより容易に行える。

１１．治療に難渋した人工骨頭置換術後感染の2例

宮崎県立宮崎病院　整形外科　　○山口　徹　　有薗　剛　　高妻　雅和
徳久　俊雄　　阿久根広宣　　後藤　英一
的野　浩士　　井澤　敏明　　小林　邦雄

人工物挿入後の感染はしばしば大きな問題となり、致命的な結果を招く場合さえある。今回我々は人工骨頭置換術後に感染を来し、治療に難渋した2例を経験したので報告する。

【症例1】65歳男性。脳硬塞による左片麻痺、腹部大動脈瘤術後、慢性腎不全、パーキンソン病の既往歴があった。H12年12月転倒により右大腿骨頚部内側骨折を来し、人工骨頭置換術を施行した。術後MRSA感染を来し、抗生剤投与と切開排膿、持続環流を行ったが、充分な効果が得られないまま、敗血症のため術後3ヶ月で永眠した。

【症例2】75歳女性。H13年3月右人工骨頭置換術後1年で転倒し右大腿骨骨幹部骨折を来した。骨接合術2週間後に感染徴候を示し、創培養にてMRSAが検出された。切開排膿・洗浄を行ったが経過不良のため、人工骨頭の抜去と抗生剤含有セメントビーズの充填療法を行い、1年後にようやく炎症は鎮静化した。

2例の難治例の問題点を検討し、人工物挿入術後感染の治療について文献的考察を加えて報告する。

１２．当科における化膿性関節炎の経験

宮崎県立日南病院　整形外科　　○深野木快士　長鶴　義隆　松岡　知己
川添　浩史

【はじめに】当科において平成11年4月より平成14年3月までに化膿性関節炎4例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。
【対象】症例は化膿性膝関節炎男性2例、女性1例、化膿性股関節炎男性1例であった。年齢は化膿性膝関節炎65歳～94歳で平均年齢77歳、化膿性股関節炎13歳であった。
【結果】関節穿刺が原因と思われる症例が2例、血行性感染と思われる症例が2例であった。基礎疾患については糖尿病者を1例に認めるのみであった。初診時は全例に腫脹、熱感、局所の疼痛を認め、関節穿刺にて排膿を確認した。培養では全例において細菌を同定することができなかったが穿刺液検査で全例に好中球分画の上昇、糖の低下を認めたため化膿性関節炎と診断した。治療は全例初診当日に切開排膿を施行し、術後は局所の安静と全身の抗生剤の投与を行った。化膿性膝関節炎の1例は1回の切開排膿にては寛解を認めず滑膜切除術を追加で行った。

１３．感染人工膝関節を抜去し再置換しなかった2例

宮崎県立延岡病院　整形外科　　○公文　崇詞　木屋　博昭　弓削　孝雄
藤本　　徹　田口　　学　西里　徳重
山田　正寿

【はじめに】当科で1986年1月から2002年2月までに人工膝関節置換術施行した377膝のうち2例に術後感染が認められ治療を行った。
【症例1】74歳女性。約3年間ステロイド関節注入治療後、昭和61年3月12日左人工膝関節置換術施行。昭和62年2月28日関節液細菌培養にて黄色ブドウ球菌検出。昭和62年3月11日人工膝関節抜去後持続洗浄施行。その後10年間再置換せず疼痛なく膝装具装着下で歩行可能であった。
【症例2】56歳女性。平成元年4月12日右人工膝関節置換術施行。平成9年8月27日関節穿刺にて膿性関節液認め、平成9年8月28日人工膝関節抜去後持続洗浄施行。約5年経った現在、疼痛なく膝装具装着下で歩行可能である。
【結果】人工膝関節抜去後再置換せず長期経過観察した結果、2例とも膝装具下にて歩行可能で、再置換希望の訴えは無かった。

☆☆☆　休　憩　☆☆☆

特別講演（１７：００～１８：００）　　座長　田島　直也

『骨・関節感染症の治療』

医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院院長　川嶌眞人　先生

閉　会